

研究ノート：音楽科学習における学校放送をその活用事例から考える

山崎，浩隆
熊本大学大学院教育学研究科音楽教育学専攻：教授

<https://doi.org/10.15017/4776882>

出版情報：総合文化学論輯. 15, pp.108-112, 2021-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。

研究ノート： 音楽科学習における学校放送をその活用事例から考える

山崎 浩隆

はじめに

NHK がこれまでに放送してきた小学校向け学校放送の中で音楽の番組数を見ると、1950年代後半から1974年までは、1・2年向け、3年向け、4年向け、5・6年向けに4つの番組が放送されていた¹⁾。しかしそれ以降、徐々に番組数が減少し、現在は3～6年向けの「おんがくブラボー」のみとなっている。なぜ、このように減少したのだろうか。番組数は利用状況に合わせて編成されていると考え、音楽科の授業における音楽番組の利用回数の減少によると考えられる。

音楽科教育における学習活動には、表現と鑑賞の二つの領域がある。いずれも音楽の「活動を通して」指導することが小学校学習指導要領で求められている。そのため、体験活動に授業時間の多くが使われ学校放送を利活用する機会は少なかったこと、あるいは活用しようとしても番組の放送時間と指導の時間が合致しなかったことが考えられる。しかし、学校放送番組で社会科、理科の番組を利用している学校数が多いことからすると、番組内容が視聴する学校のニーズや教員のニーズに合致したものであれば、減少することなく逆に増加することも考えられる。

現在、NHKの学校向け番組は「NHK for School」という名称で括られている。放送日時に合わせて視聴するだけでなく動画コンテンツとしてホームページ上に掲載され、利用者である各学校のニーズに応じて活用できるようにされている。また、その中で、コンテンツをした実践例も紹介されている。

コンテンツの利用環境が大きく変化した今日、「活動を通して」指導することが求められている音楽科において学校放送のコンテンツは、より充実した指導を行う上で、大きな効果が期待できる。本稿では、2つの事例をもとにそのことを考察していく。

1 「ふえはうたう」(小学校 第3学年) 1974～1997年放送

第3学年では、教科書に掲載されている通り、ほとんどの学校でリコーダーの指導が行われる。リコーダーの学習指導では、まず楽器の持ち方、姿勢、息の入れ方の指導を行う。その後、音階を構成する音を運指の難易度の易しい順に指導していく。それと合わせてタンギングの指導を行う。このような手順で練習をしていき、出すことができようになった音で短い旋律や曲の一部を演奏したりする。

これら一連の学習の中で、指導が難しいのは息の入れ方とタンギングである。これらは身体の内部での操作であるため、見て指導することができない。そのことが指導を困難にしているのである。タンギングは、前歯の裏側に舌を当てる動作が「トゥ」を発音する際の動作と共通していることから教科書等にもそのことが記載されている。難しいのは息の入れ方の指導である。動作のイメージをもたせるために「やさしく」、「そっと」のような言葉を用いることもあるが、一人一人それらの言葉からもつイメージが異なるため、息の入れ方とつながりにくいことがある。そこで、有効なのが映像情報である。

「ふえはうたう」では、ホースから水が流れる2つの様子が示された。勢いよく出てくる水の様子とゆっくり出てくる様子の2つの場面であり、水がホースから出てくる様子で息の入れ方のイメージをもたせるものである。子どもたちは、具体的に動画で示されたこと、また流れ出る水の速さが異なる2つの動画が示されたことで、息の入れ方の速さについて具体的なイメージをもつことができ、音を出すことができるようになった。

音楽の技能に関する指導については、イメージをもたせるための言葉を使うことの有効性がこれまで言われてきている²⁾。しかし、動画を視聴することによってもつイメージは具体的で子どもたちの中で共通したものになる。技能の指導においては、より有効だと考えられる。

体育科では器械運動等で子どもたちのモデルとなる動きを動画で示すことがある。子どもたちは動画で見た動きに近づこうとフィードフォワードを繰り返し、技能を習得していく。音楽でも身体の操作において見える部分はモデルを示すことができるが、見えない部分についても息の流れを水の流れで示したように、可視化できるものに代えて示すことが有効であり、そのようなコンテンツがあれば、技能の指導においても子どもたちにわかりやすい指導が可能となる。

この番組が放送されていた時点では、教師がコンテンツを自作することが困難であり、リコーダーの範奏、指導が苦手な教員によってはたいへん有効な内容であったと考えられる。今日、機器の発達によりコンテンツ作成が容易になったとはいえ、多忙な学校現場においてコンテンツ作成に時間を確保することは難しい。このように不可視の部分を具体的にイメージできるような動画コンテンツが放送されたり、Web上で閲覧できるようになると、より効果的な技能指導が実施できるだろう。

さて、この番組を活用して有効だったことがもう一つある。それは、テキストに掲載された楽譜である。テキストには、リコーダーの技能指導に適した曲や歌唱教材の新曲の楽譜が掲載されていた。楽譜があると、子どもたちの習熟の実態に応じた速度で伴奏することができる。また、難しい部分、よくつまづく部分だけを取り出して練習させることもできる。現在、テキストは発行されなくなっている。HPにコンテンツとして楽譜を掲載す

るのは著作権上、難しいと思われるが、何らかの方法で入手できるようになることを期待したい。

2 「にほんごであそぼ」(幼児番組) 2003年～ 放送

小中学校の音楽科学習では、わが国の伝統音楽を取り扱うことが学習指導要領で示されている。

中学校の教科書には、歌舞伎、文楽、能などが掲載されており、各学校でそれらの中からいくつかを取りあげ、学習活動が行われている。ただ、伝統音楽は生活の中で耳にする機会も少なく、ポピュラー音楽が生活の中に溢れている環境の中にいる児童生徒にとって身近な音楽とは言い難く、基本的な知識を身に付けている児童生徒はほとんどいないと考えられる。

そこで、伝統音楽をわかりやすく短時間で説明したり、その特徴を見いだしたりする活動が必要になる。そのために有効なのが幼児番組「にほんごであそぼ」である。「にほんごであそぼ」は2003年から2022年2月現在も放送されている³⁾。番組の趣旨については「日本語の豊かな表現に慣れ親しみ、楽しく遊びながら『日本語感覚』を身につけることによって、コミュニケーション能力や自己表現する感性を育みます。狂言などの伝統芸能を通して、日本の文化に親しんでもらうとともに、コンサートやロケで、全国各地の魅力もお届けします。4)」と示されているように、伝統芸能も内容に入っており幼児向けに制作されているため、小中学生にも当然わかりやすい内容になっている。

本稿で紹介する実践例は、中学2年生を対象として行われたものである。題材は「文楽の特徴を理解して聴き、日本の伝統芸能のよさを味わおう」、文楽への関心を高めるとともにその特徴をつかみ芸能

としてのよさを味わうことが目的とされたものである。授業は平成26年10月7日に熊本市立A中学校で行われた。授業者はA中学校で音楽を担当していた中島千晴教諭である。

中島教諭は、この題材を構想するにあたり「導入にあたっては、一般的にも話がよく知られた『竹取物語』を抜粋して鑑賞することで、興味関心を引き出したい。」と学習指導案に示し、「にほんごであそぼ」で放送された中から文楽「竹取物語」を視聴させ、動画の中から文楽の特徴を見出す活動を行った。

授業では、最初に「竹取物語」の一部を授業者による朗読と文楽とを比較する活動が行われた。

文楽のよさを問われた生徒たちは、泣いている声などがリアルに表現されていてわかりやすい、感情がこもっていいなどを挙げていた。その後、文楽の表現方法として人形を使うこと、セリフは後ろの人(太夫)が語ること、加えて三味線を用いて表現されてい

ることを確認し、この三者にそれぞれどのような特徴があるのか、動画を何度も視聴し見
いだしていく活動が行われた。それをもとに、三業のそれぞれを生徒が分担して担当し、
三業一体の体験活動を通して文楽のよさを味わう活動が展開された。

このように生徒たちにとって身近とは言い難い日本の伝統芸能、伝統文化のよさを見い
だしたり感じ取ったりするためには、まず短く分かりやすい資料が必要である。その資料
をもとに生徒が主体的に芸能や文化にかかわる活動ができるか否かは、指導の仕方次第で
はあるが、まずはそのような資料・コンテンツがなくては、そのような授業を構想するこ
とはできない。

「にほんごであそぼ」の放送は現在も続いている。このような番組が続くことで、日本
の伝統文化への扉が開けやすくなる指導や授業が今後も実践されることが考えられる。さ
らに、幼児番組だけでなく学校放送の中でも日本の伝統芸能・伝統文化の指導に特化した
番組が制作されると、指導や授業はさらに実勢しやすくなるだろう。そのような番組が制
作されることを期待したい。

おわりに

本稿では、NHKの教育番組を音楽科の学習活動で活用した2つの事例を紹介した。

これらから考えられることは、不可視の部分が多い音楽や音楽の技能を指導する上で動
画コンテンツがたいへん有効だということである。にもかかわらず、番組が減少したのは
非常に残念である。番組の減少は利用回数の減少によるのではないかと冒頭で述べたが、
その原因を改めて考えてみたい。

大きな要因は先に述べたように、放送時間が固定されることだと考えられるが、これは
コンテンツとしてホームページに掲載されることから解消される。次の課題は、学校現場
のニーズとのミスマッチである。「にほんごであそぼ」を中学校で活用した事例を報告し
たように、本来この番組は幼児向けのものである。つまり、番組の制作意図と反した活用
を学校現場では行っているということである。番組の制作にあたっては、当然調査が行わ
れたのであろうが、調査に不十分な部分があったのではなかったのではなかろうか。調査
の内容、規模を見直し、学校現場のニーズに即した番組を制作していただくと利用する教
員も増え、利用回数も増加するのではないかと考えられる。

Web上にコンテンツがあることで、時間に制約することなくそれらを活用することがで
きようになった。だからこそ、学校現場が求めるコンテンツはより明確にすることができ
るのではないだろうか。

指導する教員の声をできるだけ多く拾い上げ、現場のニーズに応じたコンテンツを制作し
公開していただくことで、さらに充実した学習指導が実現できると考える。そのことが実

現することを期待したい。

-
- 1) NHK アーカイブス <https://www.nhk.or.jp/archives/> で音楽教育番組を検索した。
(2022/01/28 に閲覧)、および 渡辺誓司, 小平さちこ 2011 「進展する教室のデジタル化と教育利用のこれから～2010 年度 NHK 学校放送利用状況調査から～」『放送研究と調査』 pp.58-82.
https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/report/2011_06/20110606.pdf
(2022/01/28 に閲覧)
 - 2) 音楽の技能に関する指導言については、篠原秀夫 1989 「音楽科教育における言語指導行為の研究 (1)」北海道教育大学紀要 第一部 C 教育科学編 40(1), pp.101-113。
をはじめ、多くの研究や実践が報告されている。
 - 3) NHK 放送史 「にほんごであそぼ」
https://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009040386_00000
(2022/01/28 に閲覧)
 - 4) NHK 「にほんごであそぼ」
<https://www.nhk.jp/p/nihongo/ts/K8MXJPY2MM/> (2022/01/28 に閲覧)

[A Study of School Broadcasting in Music Studies from the Case Study of its Use]
[YAMASAKI, Hirotaka・熊本大学大学院教育学研究科教授・音楽教育学専攻]
[現在の研究テーマ：戦後日本の音楽教育と教員組織]